

恵みと真理のニュース



2014 年 4 月の三次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養 5 洞 458-5 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



【証】

あらゆる苦難を勝つようにさせ栄華な天国の道で

導いてくださる神様に感謝を捧げます。

私は幼い頃村と友達と共にクリスマスのような行事の時だけただ興味を持って教会に行ったことはありますがイエス様を救い主として信じる信仰がないまま成長して偶像崇拜する家庭に嫁に行きました。旦那はある時になるとお寺に行き、新婚の初めからとても経済的にも大変な生活をしました。結婚する前に職場で知り合って結婚後も続けて仲良く過ごす友達がいました。その友達が何回も私を伝道しましたがてんで宗教を持つことすら嫌いで福音を拒否しました。それでいつも主日になるとその友達は教会に行き私は世に中に向かいました。牧師の家を借りて住んでいるのにも神様と教会について否定的な考えるのは変りませんでした。長い間同じ建物で仲良く過ごしている方は神様と教会を熱心に仕えていました。私達の教会の職分という首区域長でした。その方の家に伝道士がよく訪ねて私に会うたびに私がそっけなくしたにも関わらず私の家の扉を捕まえて祈りたりしました。初めは私がそんなに嫌がって冷たくしたにも関わらずなぜ親切なのか理解ができませんでした。しかし、ある日からその方の祈りが真に祝福し感謝の声で聞こえられて私の心の扉が開き始めました。伝道行事である天国の祝いをすると聞きすぐその方について教会に行きました。教会に通い始め一ヶ月になりまだ私の信仰がなく弱い時、神様の恵みで私の家を買ってソウルからアンヤンに引越しました。引越する私に伝道士はチョヨンモク牧師の話をしてくださりアンヤンに行くなら必ず恵みと真理教会に通うことを勧めました。その方の勧めで私達は恵みと真理教会に通いながら説教に恵まれ日ごとに信仰が成長しました。翌年には旦那も主を受け入れました。私は身に余る区域長の職分まで受け、熱心に礼拝し奉仕する中でたと

え経済的には豊かではないが以前には感じなかった体と心の平安や喜びや希望が溢れました。どころが何年後、旦那の個人事業をしてから経済的に苦しくなりました。子供の教育にかかる費用などこの経済的な苦しみを私の力でどうしても解決し乗り越えようとしてしました。昼には職場に通い夜にはベーカリーを習う学校に通いました。製菓の資格を取って他の人のベーカリー店で働きながらある程度の技も学んだ後、家を担保として銀行からお金を借りてベーカリー店をオープンしました。体は疲れて苦しかったですが旦那と共に熱心に働きました。そうしながら問題になったのは私の信仰の姿が以前のように初信者のような状態に戻り奉仕する楽しみも忘れてしまうことになったのです。いつも喉が痛くて薬をよく飲んで私のからだを守る余裕もなく生活しながらついに娘二人を結婚させて後になってやっと村の病院に行ったら大きい病院に行ってみなさいと言われました。ソウル大学病院に入院して“喉頭狭窄症”手術を受けました。病院から私の体質は完治するのが難しいと言われました。結局生業であったベーカリー店を辞めなければなりません。その間アンサンに引越している時にお腹がとても痛くて大腸内視鏡の検査を受けましたがまた大きい病院に行ってみなさいと言われました。すぐ、大きい病院で精密検査を受けた結果“ベーチェット病”という診断を受けました。とても長い間炎症を治療しなかったので大腸が奇形になり水も多くなっているそうです。以前に患った喉頭狭窄症も実はこのベーチェット病の症状だったのです。一生薬を飲まなければならない病気だそうです。今は珍しい病気と判定され政府の支援で三ヶ月に一回は病院に行き薬をもらって飲んでいます。以前には一度口内炎になると舌が堅くて動かなくなり食べ物を食べる事も苦しかったし何ヶ月が過ぎても治るきみがなかったです。しかし、最近は体を無理して

使ったり様様な事に気を使うなら疲れるが以前に比べるとなんでもなくただ神様に感謝するだけです。そして、口と体のなかの病気だから他の人が見るには普通に見えるので主の栄光を隠せないで感謝します。喉が痛くて唾を飲み込めないで集めてつばを吐いたりしながら神様にお乗り増した。まず神様に感謝しながら祈りました。たゆまず薬を飲みながら以前より信仰と愛で真に神様を礼拝し愛するように導いてくださった事感謝します。たとえ完治が難しいとしても休まず薬を飲みながら苦しみをよく耐えて治療のたいする希望を忘れないようにしてくださったことにも感謝しました。なによりも十字架の血で私の罪を許してくださり救ってくださった主の恵みもうすぐ私の全ての涙を拭いてくださり再び死亡がなく悲しむことと痛みもない天国で栄華を極めた生活を既に私をために予備してくださった神様の無限な恵みに感謝を捧げました。そして聖歌隊で奉仕する願いができ聖歌隊で賛美するように練習する時には痛くないように祈りました。神様は私の祈りに答えてくださって足りない私に賛美で神様に栄光を捧げるように聖歌隊員にならせてくださいました。ハレルヤ！感謝する私達に神様は天国で神様に出会う日に大きい賞と褒めるように忠実に神様と教会を仕えるように栄光な勳士の職分を旦那には尊い安手執事の職分を与えてくださいました。振り替えてみると神様が私といつも共に行ってくださいました。“神様は私の祈りに答えてくださって足りない私に賛美で神様に栄枯を捧げるように聖歌隊員にならせてくださいました。”（コリントへの手紙二 12：9）ハレルヤ！主に呼ばれる日まで与えてくださった職分を担えこの姿でただ信仰と愛で主の栄光ため力を尽くしながら主の国のため前に進みます。



【信仰コラム】

神様が責任を受け入れるようにするには

“君の行事をエホバに預けとそうすれば君の経営することが叶われる”(箴言16:3)

“君がするすべての事を私に任せなさい。私が責任を持ってやろう。”と話してくれる方がいたらその約束を受けた人は心強くなります。しかし、意外にも神様がおっしゃるには“君の行事をエホバに預けとそうすれば君の経営することが叶われる”(箴言 16:3)しました。神様に万事を預ければ、責任を負ってくれるという意味です。神様が責任を負うように任せるその具体的なことが何かを見てみます。第一に、祈りしなければなりません。祈った後は万事を神様に延ばして自分は袖手傍観したら良いと思う人がいます。これは神様に任せるという意味を誤解したことです。お祈りとは自己責任を回避する手段であったり、怠けをするための方便です。さらに積極感と能動的に活動するためのことです。祈りは私たちが肯定的な生活をするようにします。神様は怠け者を面倒を見せたくないです。“神様、私の未来のため責任をとってください。”“私が当面した問題を責任をとってください。”と祈念す

ることはよくすることです。しかし、自分がしなければならない事を忌避して、自分にできる事もしていないながら、これは私の誤りです。私たちが任せなければならないことがあります。私たちは不足して弱から神様の応答に待って意志します。第二に、凡事に感謝しなければなりません。イスラエル子孫の歴史が私たちに言ってくれた教訓が非常に多いです。その中に欠かせないのは彼らが広野で恨み、滅びたという事実です。イスラエルの子孫たちが凡事に感謝するだけしていたら神様が責任を負って彼らをカナーンへ引き渡したと思います。聖徒は基本的に理由を持っています。これは救われた事実による感謝です。、イエス・キリストによっている救援がどれほど大きいかを分ったら、一生中に感謝が止まらないだろうです。

ほかにも自分が持っていることを考えながら感謝すべきです。自分の肉体を考えてみると感謝する条件が一つや二つがありません。また周囲を見渡すと、神様からもらって享受しているものがどれだけ多いのか分っています。神様に感謝する生活はいい方法です。これは神様が啓示したものです。第三に、神様の言葉を信じて追従しなければなりません。モーゼの年 80 に神様が彼にイスラエル民を率いてカナンに行くことは重大な使命でした。モーゼの年

から見ても話術で見ても、説得できる立場がありませんでした。。しかし、神様の言葉を信じて追従して彼は杖一つ持ってエジプトへ入りました。彼がすぐに行ってできることは神様がくれたお話を伝えることしかなかった。神様が十の災いを降りて結局降伏降服しました。神様が責任を負ってもらったものです。モーセの後継者ヨシュアやっぱり神様の言葉を信じて追従しました。そうしたらその大きな鉄壁が弱くて行ってがらりと崩れました。神様が責任を負ってもらったものです。神様の言葉を完全に信じて従うためには、神様の言葉に反するすべての理論を捨てなければなりません。神様が聖書に数多くの約束と命令を記録した理由は信じて従う者の一生を担当してくれないためのものです。

皆さんはこのような啓示の言葉を追って神様にすべての行事を任せたら神様が責任を負って皆さんの経営をかなえてくれるのを体験することになって下さい。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム『緑の牧場、清い川』本の語り中」

死の最後



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

人がまことによく暮らそうとすれば自分の存在理由と目的が分からなければなりません。生の意味を思っやりがいのあるように暮らすことは人だけが持つ特性です。また一つは逆説的だが人がよく暮らすためには死の意味が分からなければならぬし死という問題に対する解答を得なければなりません。しかしその解答は人間の思索や努力としては得ることができません。神様の啓示ではなければ分かるあてがないイエスキリストのあがないと復活なしには解決の道がないです。だからイエスキリストの死と復活はすべての人が持っている疑問と問題である死に対する明快な返事で解決策です。死に関して本文にこんなに記録されました。**“最後の敵として滅ぼされるのが、死である。”**

今日は死が何で死の最後がどうなるかに関して深度あるようによく見ます。そしてイエスキリストの復活が私たちに持って来てくれた勝利による喜びと幸せを満喫しようと思います。

第一、死はすべての人に敵です。

死は人に一番恐ろしくて悪質的な敵です。人が生きて行っていたら嫌悪するとか恐ろしがるとどんな対象ができることができます。その嫌悪と恐れの原因をあばいて見れば概して死と係わっています。死はすべての人に共通された敵です。人生の戦地で死に犠牲されない者がいないです。いくら強い者でも死と争って勝つことができません。王や英雄、豪傑でも死の前ではひざまづくようになります。豊かな人生経験と多くの知識も死の前では無用の物です。薬と病んだ者等を数えきれなく治してくれた医師でも彼に死が尋ねて来て手を突き出せば道理なしに引かれて行かなければなりません。世界的な大金持ちでも死をとり除く妙薬を求める道はないです。**“あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る。”**（創世記 3:19）と言った神様の言葉は死を避けることができない人間の運命を言ってくれます。

第二、死は滅亡受ける敵です。

人間をこのように恐ろしくして悲しみと苦痛の泥沼で投げこむ死も永遠に余勢を駆って勝つことはできません。本文に記録されるのを死は滅亡受ける敵と言いました。どのようにして死が滅亡するようになるのでしょうか？死の滅亡と言うのは死の敗北、死の最後があることを意味します。死が始まったことは人間の罪でよったのです。最初の人間、アダムが神様の命令を逆って善悪を知る木の実を食べることで罪を犯したしその結果で死ぬようになる運命に置かれるようになりました。

ローマ人への手紙 5 章 12 節に “このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。” と言いました。死はアダムの犯罪でよったことで罪の権能が具体化されたのです。神様は人間を死から放してやるために死を敗北させる者として神様の子イエスキリストを送りました。

神様の子イエス様は 3 年半の公生涯の期間の間に死んだ人をいかすことで死を征腹する者なのを現わしました。マルタとマリヤは親を早く死に別れてお兄様ラザロを親のように思いながら暮して来ました。ところである日そのお兄様が熱病が立ち入って死んでしまいました。ラザロが葬られてから四日になる日にキリストがマルタとマリヤが住んでいるベタニヤから村へいらっしやいました。マルタとマリヤはラザロの墓でイエス様を導きました。イエスキリストがマルタに “石を移しておきなさい。” しました。マルタが墓をはばんでおいた石を移しました。イエスキリストが **“大声で「ラザロよ、出てきなさい」”** しました。その瞬間ラザロの死体が起きて墓の外に出ました。**“彼をほどこいてやって、帰らせなさい。”** イエス様の言葉どおり人々がその布地とタオルを解いてくれました。イエスキリストが死者をいかした事件は死を完全に廃してしまう勝利の予備的な予兆です。

イエスキリストが死を廃しようとするれば先に人間に死を呼び入れた原因になる罪を無くすために十字架に釘つけられる事のあがないの死を死ななければならなかったです。神様の子イエスキリストが人の身を着て世の中へいらっしやなければならぬ理由がここにあります。ヨハネの第一の手紙 3 章 5 節に “あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。” と言いました。ヘブル人への手紙 2 章 14 節、15 節には “このように、子たちは血と肉と共にあずかっているの、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。” と言いました。アダムの不従順によって世の中に罪が入って来たし、これによってすべての人が死を避けることができなくなりました。しかしイエスキリストが来たので人間はイエスキリストにあって罪と死から自由を得るようになりました。一方アダムの罪はすべての人に罪と死を持って来てくれたが、イエスキリストの死ぬことと復活はすべての人に義と命を持って来てくれるのではないです。各人がイエスキリストを信じて迎接しなければなりません。誰でも復活したイエスキリストを信じるだけで罪から自由を得るようになって義のあるようになって死から自由を得るようになって命の中で王になります。しかしイエスキリストを信じる者と言っても肉身の死が免除されるのではないです。イエスキリストを信じて魂が生まれかわって新しい命を得た者でも肉身の死を経験するようになります。イエスキリストを信じて生まれかわって新しい被造物になって新しい命を得た聖徒は肉身が死に至っても罪の刑罰で死ぬのではないです。イエス様が私たちの罪を担当して代わりに刑罰を受けてたまらなかったのがクリスチャンの肉身の死は刑罰ではないです。何故ならば公義である神様は一回のあやまちに二つの 刑罰を下げないからです。それではどうして聖徒たちも死ぬことですか？時間と空間の制限を受ける私たちの身は天国で住むのに相応しくないので。

私たちの身は生まれかわったたましいに適当に変化されなければなりません。その日のためにしばらく待つ状態に置かれるようになることがクリスチャンの死です。だから聖徒たちには死と言うのは嫌悪とか恐ろしいのではないです。復活したイエスキリストを信じる人には死の意味が変わりました。死は敵だが必ず滅亡受けるようになる敵に過ぎないです。

第三、死はもっぱら後で滅亡受ける敵です。

私たちに三種類の敵があります。罪とサタンと死です。イエスキリストのあがないの死と復活によって信じる者に罪は除去されました。成功的に完全に除去されました。サタンも決して聖徒のたましいに手をつけることができません。聖徒はサタンを対敵してしりぞけの権勢を受けました。サタンは将来に無底坑に閉じこめられるはずでその後にはわずか硫黄で燃える池に投げられるでしょう。そして死はもっぱら後で滅亡受ける敵です。

私たちの肉体があがないを経験するようになるまで死は聖徒たちの肉体に対してはずっとその影響力を行使するでしょう。だから私たちは身があがないされるその日を待ちこがれます。私たちのたましいはあがないをもう経験したが、肉体のあがないは主イエスキリストが来臨なさる時経験するようになるでしょう。その日がすぐ聖徒の身が復活される日です。この復活の日に対して今日の本文に記録されるのを “**しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである。ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち、それから終末となって、その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。**”（コリント人への第一の手紙 15:20, 23, 24）と言いました。イエスキリストの来臨とすべての聖徒の復活によって死の影響力と支配力は完全に消えてしまうでしょう。その日の光栄と歓喜に対して聖書にこのように記録されました。**“ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。死のとげは罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。”**（コリント人への第一の手紙 15:51 ~57）と言いました。

復活したキリストを信じる皆さんは死の意味が分かって死はもっぱら後で滅亡受ける敵に分かるようになった人々です。だから皆さんの心霊にイエスキリストの復活が持って来てくれた驚くべき偉い勝利、完全な勝利による喜びと感激が充満するように願います。